

開催地名	茨城県神栖市
開催日時	令和7年10月5日(日) 10:00～11:40
開催場所	波崎総合支所・防災センター
語り部	大峪 やす子(三重県紀宝町)
参加者	神栖市防災士協議会 会員防災士22名
開催経緯	台風・大雨による自然災害が増えている近年、実際に災害を受けた講師によるご自身の体験、地域の自主防災の取り組みや活動、訓練などを学び、2011年3月11日の東日本大震災の被害を受けている神栖市においても、防災意識が薄れていくことのないよう、会員の防災意識の更なる向上と災害対応力の強化、防災活動に繋げていくことを目的とする。
内容	<p>紀伊半島大水害から立ち上がった紀宝町津本地区自主防災会の取組</p> <p>(1) 2011年(平成23年)8月30日発生の紀伊半島大水害 台風12号による奈良県、和歌山県、三重県の3県を中心とする驚異的な豪雨により、熊野川の水位も18.3メートルを記録、熊野川上流の5つのダムを同時に放流。紀宝町の雨量は1000ミリを超え、熊野川の支流相野谷川(おのたにがわ)が氾濫した。 9月3日17:20頃、9.4メートルある輪中堤を超え住宅街の道路が浸水し始め、氾濫した川からありとあらゆるものが流れてきた。 輪中堤が決壊し、家屋が水没、新築したばかりの平屋家屋も水没していった。消防署、警察に連絡しても繋がらない状況で、高台に避難した者、屋根に上がり一晩過ごし救助を待つ者もいた。流木等で道路の水も中々引かず、2昼夜この状況は続いた。</p> <p>津本地区住民118世帯 床上浸水 81世帯 床下浸水 3世帯 死亡者 1名</p> <p>(2) 津本自主防災会誕生 紀宝町災害ボランティアセンターが開設され、たくさんのボランティアの人々が集まり、ありとあらゆるものが流れ着いた家の中を、暑い中てきぱきと片付けてくれる姿を前に涙があふれ出た。</p>

	<p>全国各地の個人や団体等から食料や日用品などの救援物資が届けられたが、自宅で困難な避難生活を送っている人々にはこれらの物資は届けられなかった。</p> <p>2011年11月アンケートを実施し、津本地区住民の意見をまとめた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大里地区にある避難所は道路の浸水により避難所に行けなかった ・津本地区に避難所が欲しい ・防災無線が聞こえなかった ・ライフラインがとまり、在宅避難者には物資が届かない ・携帯電話が数日間通じなかった ・津本地区に自主防災会が必要である <p>紀伊半島大水害から得た防災・備えるということは、災害から自分、家族、住民、そして地域全体が生き抜くこと。こうして津本自主防災会が誕生した。</p> <p>(3) 防災・備え</p> <p>2012年11月23日初めての防災訓練を実施（参加者102名） 消防団による放水訓練、炊き出し訓練、子供たちも楽しく学べる防災訓練に参加。</p> <p>2013年3月、防災拠点、安心して避難できる場所として紀宝町津本防災センターが完成。</p> <p>東京大学大学院情報学科総合防災情報研究センター客員教授 松尾一郎様の指導により、紀宝町は2012年（平成24年）2月より風水害を対象とした国内初のタイムラインを策定した。2015年（平成27年）3月には大里地区にもタイムラインが導入され、紀宝町全体が連携され、災害に強い町づくりが実現。</p> <p>タイムラインとは、防災に関わる人々が連携、事前調整を図り、台風等の災害に対しそれぞれの役割、いつ、どこで、だれが、何をするのか、対応行動を定めたもの。</p> <p>2015年（平成27年）7月、台風11号が発生、相野谷川が増水しタイムラインが発令。33世帯、61人が早めの避難をした。後にタイムラインワークショップを開き、その時の避難時の反省や課題などを話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児を持つお母さんの授乳の場所の確保 ・避難所に入りきれず、車中で過ごした ・テレビがないので情報が入らない ・山水を引いているので、台風時に水が出ないなど
--	---

子供たちも交え、身近なもので避難時に必要なものを制作（新聞紙で作ったスリッパは温かくて好評）、通学路で危険な場所を見つける取り組みや、防災チャレンジ運動会など、子供たちが楽しめる防災訓練によって、親御さん、祖父母なども一緒に参加をしてくれる。そういった地域のつながりをこれからも続けていく。



開催地より

ご自身の貴重な体験、地域の防災の取り組みをお話いただき、ありがとうございます。今後の防災活動の強化、向上につなげていきます。